

「銀座レポート」

三浦大介（元美術新聞社編集長）

不況の続く中、今銀座の画廊はどうなっているのか。景気のいい売買の声は影をひそめた現在、しかし多くの画家の活動は好不況に関係なく次の爆発の機会を待つ活火山のマグマのごとく深紅に燃え続けているのである。今回は銀座の老舗画廊のひとつ「地球堂ギャラリー」の田辺すすさんにお話を伺ってみた。

一沖繩にどんな印象お持ちですか

「主人と二人で沖繩に行ったのはもう七年も前になりますが、宮古島とか、石垣島とか、やはり島がよかったですね。特にすばらしかったのは与那国ですか…きれいな海、空、そして、とくに人間があまりいないところ。人間がいても、自然と一体になっている。またいつか行きたいと思っています」

一画廊で沖繩の画家も沢山展覧会やっていると思いますが、沖繩の画家について

「不幸な戦争体験や地理的条件からでしょうか、明るさの中にもどこか悲しさを秘めていて、やや暗い。それと、これは結局個人の問題かもしれませんが、もっと大きく心を開いてほしい。もっと自由に絵を描いてほしいと思います」

一ところで、銀座で何年画廊をやっておられますか

「26年目。昭和42、3年頃ですか、画廊を始めたのは…主人が無所属の画家でしたから自然に、どこの会派にも属さない無所属の画家、現代美術や抽象、また東京で発表の場のない地方の画家が多くなりました。多くの無名画家と同時に、難波田龍起先生をはじめ実力ある作家に話題の展覧会

を開いて頂けたことは、大変うれしく、また誇りに思っております。

一ご主人の田辺武次先生（故人）について

「“生涯に一度も栄誉に属さなかった”と紹介されたこともありましたが、実際、一度も賞をいただいたこともなく、また本人は貰おうともしませんでした。本当に絵が好きで、純粋に、自分に正直に生きたのでしょねえ」

一その作品

「具象から抽象へ、そしてまた具象へと、作風が大きく、また極端に変貌しましたので、なかなか評価し難い面もありますね。でも、私が一番いいと思うのは晩年のエンジェルシリーズ（写真）。

自分の心の世界を、自分の好きなフォルムと色彩で自由自在に表現しています。今から30年ぐらいも前に、大画面で宇宙を描いている点など時代を大きく越える内容がある上に、明るい向日性で人の心を明るくしてくれ

る。また子供にもわかるワカリヤメサがあり、きっと21世紀に魅せる作品だと思っておりますが…もっとも作品というものは、創る人の自由もあれば見る人の自由もありますから、これからの若い人達が主人の作品をどう評価するかについては、私自身大変興味深いところです」

一沖繩で描いた作品もありましたね
「亡くなる直前に沖繩の石垣島で描いた風景で、絶筆になりました

た。具象のセザンヌ風の作品で、私は傑作のひとつだと思います。人けのない平凡な白い道と土塀、無限に広がる空と見えない海、そして沖繩の明るい太陽がさわやかに描かれていて、沖繩が大好きだった主人の心がそのまま表現されています。できればこの作品は沖繩の美術館に飾ってほしいのですが…」

一長年画廊をやっておられて、多くの画家、多くの作品を見ての素直なご感想は？

「やはり心をこめた作品、心のこもった作品がいっぱい。画家はというよりも作家は、賞だとか、画壇での地位だとか売れたとか売れないとかの 邪念にとらわれないで、ただ一生懸命に、自分の絵、自分の心を自由自在に描いた、その作家の心のこもった作品を目指すべきでしょうねえ…それができる人がホンモノの作家であり、不況はホンモノの作家にとっては雑念が払えて、絶好の勉強の機会。いよいよこれから勝負の時、ホンモノのみが生き残れる厳しい時代がきたと私は思っています」一絵が売れないこの不況の時に、新しくオークションを始めたそうですが

「バブルが消えて、発想の転換が求められているのは、なにも政治家だけではない。画家も画商も自分を見直して、新しく出発しなければなりません。薄っぺらい、安易な絵が売れない今だからこそ、ホンモノの絵を見せたい…と思ひまして、東京オークション「貴方が育てる作家展—アート・オブ・ブライズ」は、全部私のコレクション。会場に投票箱を置いて、見た方が気に入った作品があったら投票する。最高値つけた人に売るわけですが、もう3回目。好評ですが、コレクション作品を売るというのはコレクターの目（鑑識眼）が厳しく問われますし、また作品を他の人に渡すということは、自分の愛娘をお嫁にやるように複雑で、微妙な気持ちですね、売りたいくもあり、売りたいくもなくって…」。（みうら たいすけ）



地元のビールが漸然うまい

最も新鮮

オリオンビール

郷土の損害保険会社

大同火災

〒900 那覇市久米2-2-20 TEL.867-1161 (代表)

自分を掘り下げていくこと。

それが、作品を表現すること。

座談会 上原一明 知念良智 江木健

今回はこれからの活躍が期待される若手作家3人に、制作活動の周辺や、これからの彫刻のあり方についていろいろと語ってもらった。

GV：まず初めに彫刻家になるきっかけについて聞かせて下さい。

江木：ありきたりなんですけど

立体造形を造っていくことが好きだったこと…小学校の頃から立体で何かを作っていたらと思ってたんです。僕は十分に育って、どちらかっていうとプラモデルとか出来合いのものを買って作るより、竹を切ってきて竹トンボを作ったり、竹馬だとか笛を作ったり…、粘土で怪獣を作ったり、自然のなかで遊ぶことが好きでした。

上原：小さい頃から絵が好きで高校の頃までは画家になろうと思って、絵ばかり描いたんです

けれど、高校2年の時に友達をモデルに作った石膏像がきっかけで大学は彫刻に進みました。が、絵画に未練はありましたね。でも、素材の勉強をするうちに、どんどん彫刻にのめり込んでいきました。今、主に扱っているのが木なんですけれど扱うほどにおもしろくなっていきます。

知念：僕も小さい頃から物をさわったり、作ったりするのが好きでした。好きでやっていけばどんどんはまっていくわけです。だから彫刻家になったきっかけを聞かれてもなかなか答えられないというか…、困ってしまいますね。

江木：“きっかけ”って考えていけば中学の時、高校進学で美術専門の高校にするか、普通高にするかで、結局は普通高校に進学したんですけど、その時美術の方に進む意志を固めましたね。

GV：今年で第3回目を迎える「街と彫刻展」ですが、皆さんの反応はどうですか。良かった面、反省する面など、いろいろあると思うんですが。

江木：彫刻展を始めるきっかけというのが、丸山先生と上條先



左端から江木さん、上原さん、知念さん

西 材

3F：画材フロア

陶芸用品

顔録制作

CULTURE PLAZA
藝みつや書店
〒902 沖縄県那覇市西風1-1-3 電話(098)863-1650 住
フックンミリ(098)861-0315

忠孝酒造

一よりよい古酒づくりがテーマですー

眠れる壺の美酒

生と僕の3人展を浦添美術館でやったときに「3人だけじゃなく、今度はパレットくもじに置いてみようよ」という話が出て、茂久地都市開発の大田さんに話したら、現実になっちゃったわけです。

知念：僕はちゃんと意味があると思うんです。3人から始まって「街と彫刻展」というタイトルから、街は都市空間でそこに彫刻を置くわけだから、公害になったらいけないし、そこら辺のところを良く考えないといけないでしょう。それに野外に置くわけだから、触られることをや、雨風にさらされることを予想して制作をしました。そして親しみのある物を作ること。

それから個人ではパレットのような場所には設置することもできないわけですし…。

上原：僕は制作する側から若手の作家を育てる意味でいいと思います。毎年テーマが与えられていて、いろいろな素材に挑戦

できるわけです。自分自身が普段扱い慣れている素材を離れて制作していて、新しい発見をすることができました。

江木：僕は鉄が専門で、ほかの素材に興味を湧くことがあるんですけど、なかなか自分の中から抜け出すことが難しいんです。その点ではテーマが決まっているんで、自分の専門を抜けたところで、苦しみながら、楽しんで制作をしています。

GV：扱いなれている素材とは別のテーマで制作していて、自分自身の表現したい部分が、制約されることはありませんか。

上原：僕は木を主に扱っていますが、前回のテーマで石を扱ってみて割れ肌とか、境面とかの質感の違いを出すのが石のおもしろいところなんです。その石の性質を木でも生かすことができなにか考えさせられました。

江木：僕の場合は逆にほかの素材を扱うことで、いつも扱っている鉄の性質や鉄を使って造る作品のイメージがより明確になってきたと思います。

上原：あるイメージがあってそのイメージにそった作品作りをしていくんだけど、どんどん変わっていくんです。そこから新しいイメージが湧いてきて次の作品が生まれてきます。

知念：これが彫刻家になった理由じゃないですかね。作っていくからおもしろいんです。視覚芸術というか。伝えたいことを僕は物を使い、形にして表現していくわけです。

江木：自分を表現するひとつの目的、ひとつの方法なんです。

できた作品を展示したときに、

観た人が自分の思ってもいなかったことを言ってきたりして、こんな世界もあったんだと自分の知らない自分とか、世界を発見することができるわけです。

知念：形（フォルム）が先行し



——知念良智（ちねん りよいち）——

- 1966 沖縄県生まれ
- 1992 九州産業大学大学院修了
- 1991 国展 第65より出品
(東京都美術館)
- 個展(福岡)
- DOT展 第19回より出品
(福岡)
- 1992「アジア現代彫刻会」
(福岡)(釜山)
- 第1回「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
- 1993「シューボックス彫刻展」
(GALLERY WORK- II)
- 第2回「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
- 1994 シューボックス 7人展
(GALLERY WORK- II)



知念良智 作品 「時 空」

國場組グループ

國 和 會

会 長 國 場 幸 治



ひとにいつも新しく—生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270

でいて、分かりやすい形は目に留まりやすいけれど、抽象は受け入れられにくい。造る側は抽象、具象関係なく、同じ時間をかけて造りだしているんです。

GV: 「街と彫刻展」は10回までやるわけですが、これから



江木健 (語り)

- 1966 大分県生まれ
- 1991 東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了
- 1987 グループ展「あけまし展」
第1回～3回出品
(東京芸大学生館)
- 1991 グループ展「三人の彫刻展」
(浦添美術館)
- 1992 大分県美術館展 入選
(大分・大分美術館)
- 1992 二科展 入選
(東京都美術館)
「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
沖縄芸大若手作家展
(浦添美術館)
- 1993 「シューボックス彫刻展」
(GALLERY WORK - II)
第2回「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
- 1994 個展 (GALLERY WORK - II)
シューボックス 7人展
(GALLERY WORK - II)

の抱負は。

江木: その場所に置かない方がいい作品もあるだろうし、失敗、成功はやってみなければわからないことだから、10回あることで、試しているところもあると思うんです。

上原: 実験的な要素もあります。やってみなければわからないわけだし。

知念: まだ2回目なんで、どんどん回を重ねることで良くしていきたい。

上原: 成功する方向で進めていきたい。

GV: 彫刻の現在について聞かせて下さい。

知念: 今は彫刻っていうのかなとても古い言葉だよ。今の時代に生きていて彫刻の意味もだいぶ変わっていているように感じるけど。

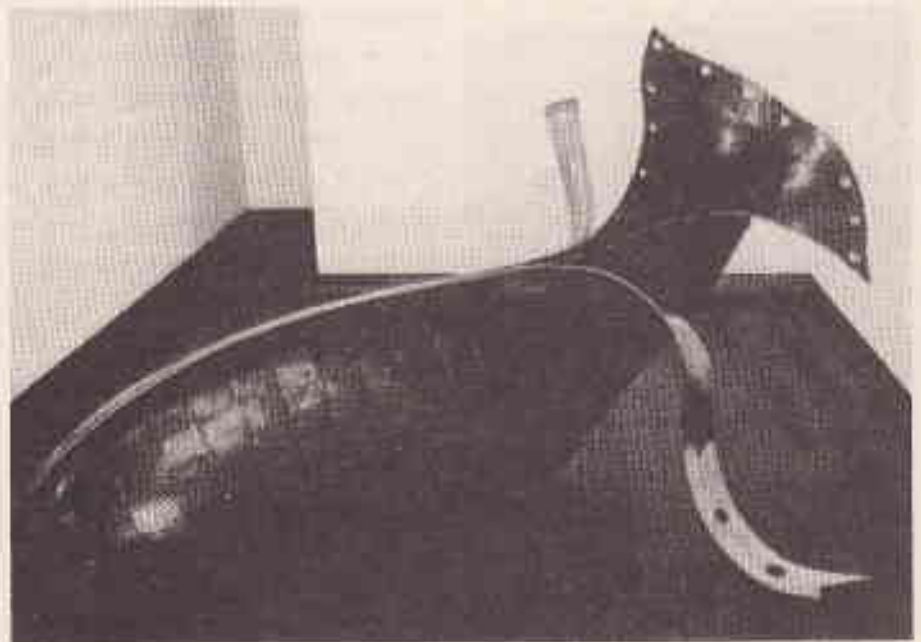
江木: 技術が専攻しているところがあって、表面的な部分を意識して、自分の表現したいことが薄くなる。特に日本の彫刻に

対して感じます。例えば、石を磨くこと、なぜ磨かなければならないのか。磨くことに意味があってすればいいと思うんだけど。

知念: なぜ磨くのかって言えば僕は光るから磨くわけで、考え方だと思うんだけど、石だから磨けるわけですよ。磨くことに意味があればいいと思うんだよ。

江木: 彫刻は音楽や演劇などと違って一瞬にして全てがわかるから、その点はすばらしいんだけど、逆に大変だと思う。だから単純におもしろいとか、きれいだとかでもいいんだけどやっぱり哲学がないと…。自然から学ぶことが大切なんだけれど、それをただ写すだけでは彫刻としての存在の意味がないと思う。

知念: 彫刻としての言葉が曖昧だし、その意味も多様化している感じがします。時間の流れと同じように変わっていくものだ



江木健 作品 「海からの贈り物 (開)」

／基礎から学ぶ／

●絵画 ●デザイン・工芸 ●彫刻 ●教育美術 ●基礎 ●通信教育

芸大・美大 受験予備校 **沖縄美術アカデミー**

WANTED!

あなたの広告を待っています
本紙サ・ギャル 係員 ☎098(855)7933

と思う。表現したいものがあるから作っていくし、その作った作品に満足したら、もう作らないだろうし完璧じゃないからやっていると思う。

江木：考えることがこれからの彫刻のあり方だと思う。できた作品と作家がつながっていない…。

上原：現代社会における彫刻の現在は、モニュメント等が都市空間の中に組み込まれることによって、一般に受け入れられる傾向にあります。

芸術産業としてうまく展開できれば、彫刻の未来も明るくなると思う。

GV：これからの展望についてお聞かせ下さい。

上原：これからはアジアに目を向けていかないといけないと思う。韓国や中国、台湾と交流をすること。アメリカやヨーロッパよりもみじかな国で共通するものを持っていると思う。

江木：現在の日本文化は西洋の文化をまねしてきたところがあって、医学にしても、それは本来日本人が持っている文化ではないわけです。朝鮮とか中国

から学んできたところがあって東洋的な部分が多いと思います。今回ドイツに行く事で僕は日本の良いところをみせたいと思っているわけです。

知念：無理をして外国の文化を取り入れるより、まず沖縄に生まれたんだから沖縄を追求して、日本へそしてアジア等、近い国に目を向けた方が共通するものがあると思うんです。それは食文化とか顔だちとかもよく似ているし。

上原：その土地で生まれた感性で、沖縄という環境で、ここにあるものを使って制作することが大切だと思う。

江木：今話してきた中で東洋とか、西洋とか地域的なこととかでできたけれど、僕らが今やっていることは自分自身の内面を表現することなんです。それを掘り下げることで、ひとつのきっかけが見えてきた感じがします。だから自分は日本人であって、日本に生まれて育っているんだということ。自分を掘り下げて行くことが作品を表現することだと思う。

GV：今日はお忙しいところど

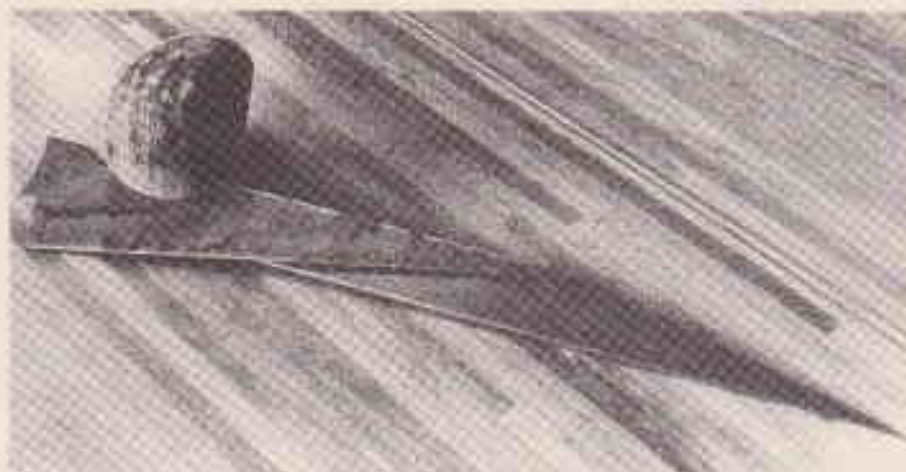
うもありがとうございました。今後のご活躍を期待しています。

(ギャラリーワークIIにて)



上原一明 (うはら かずみ)

- 1966 沖縄県生まれ
- 1990 沖縄県立芸術大学彫刻専攻卒業
- 1992 東京芸術大学大学院保存修復技術 修了
- 1989 個展「絵画・彫刻 四人展」
(那覇市民ギャラリー)
- 1991 個展「美(チュラ)展」
目黒区美術館
練馬区美術館
- 1992 第1回「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
若手作家展
(浦添美術館)
- 1993 「シューボックス彫刻展」
(GALLERY WORK- II)
第2回「街と彫刻展」
(沖縄・パレットくもじ)
- 1994 シューボックス 7人展
(GALLERY WORK- II)



上原一明 作品 「空間時の六面体 92-7」

●展示会用の額縁リースも承ります

額縁・掛軸の専門店

前田額装商会

〒900 那覇市松尾 2-7-29 ☎ 098 (867) 4811
FAX 098 (861) 0367

GALLERY WORK-II
— 企 画 —

アフリカンアート展

■5月16日～28日

アフリカの部族間で祭事や儀式等に使用されていると言う、仮面や彫像、40点余りを展示致します。



関口 茂彫刻展

■6月6日～11日

IN THE FOREST
(鉄・1A)



ギャラリーウーマン

美術館とシンポジウム

昨年より沖縄を駆けめぐっている美術館旋風。それを巻き起こしたのが美術家の豊平ヨシオさんを筆頭に美術愛好者で構成された「県立美術館を考えるシンポジウム実行委員会」だ。

“いい美術館を作りたい”という熱くみなぎるパワーがこの委員会の発足のきっかけになった。これまでの美術館シンポジ

「りゅうせき美術賞」展
〈公 募〉

若手作家輩出に意欲的に取り組んでいる「りゅうせき美術賞」展の公募内容は下記の通りです。

- 絵画：題材、画材、出品点数自由（ただし未発表作品）
- サイズ：30～50号（変形可）
- 応募資格：沖縄県出身者及び在住者、18歳以上
- 搬入：8月1・2日
（県立芸大体育館）
- 賞：大賞1点100万円
入賞5点各40万円
《問い合わせ先》
株式会社イムス
☎098(836)1863

ウム委員会の働きかけが県の美術館構想に大きく影響を与えた。

沖縄の歴史性や文化性を踏まえた美術館をという事で開かれたシンポジウムにはたくさんの人々が参加し、美術館の意味について多くの意見が交わされた。このシンポジウムを通して沖縄の美術界の解決しなければならない課題が浮き彫りにされたと思う。美術館を建設するというのはただ単に美術品を展示するだけの空間ではない。器よりもその中身が重要になってくるということである。

私も美術にかかわる仕事をしている一人として、美術館問題には関心がある。しかし、これまでの実行委員会の活動の中で私も含めてだが若い人達のパワーが弱かったように感じられた。21世紀を担っていく私た

沖縄美術アカデミー
〈生徒募集〉

今年1月より開校した芸大・美大受験予備校の沖縄美術アカデミー。受験対策だけではなく、常に“基礎から学ぶ”ことを中心にした指導を行っています。明るい雰囲気のある教室は「芸大・美大」を目指すにはもってこいの制作環境。科目内容は下記の通りです。

- デザイン科・工芸科。
 - 絵画科。 ■教育美術学科。
 - 彫刻科。 ■基礎科。
- 《問い合わせ先》
沖縄美術アカデミー
☎098(866)7047

ちの美術館として、もっと身近なところからその必要性を考えていかなければならないのではないだろうか。（とうま 勉）

編集デスク

今回は若手彫刻家3人に作家活動について話してもらった。作家になったきっかけが、幼い頃の自然との関わりの中で生まれてきたことは3人の作家に共通していた。又、制作をする過程でも自分の生まれ育った土地の影響を受けている。自分自身を掘り下げていくことで新しい表現の世界を見つけていくのだろう。さて、今回は昨年より盛り上がりを見せている「県立現代美術館」について全面特集でお送りしたい。皆さんの投稿、寄稿をお待ちしています。（当間）

GALLERY WORK-II

◇現代アートに開かれた空間◇
◆ 以外料 1日 1万円(1週間単位) ◆



絵画の専門店

画廊沖繩

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3
TEL 0988(34)6760
FAX 0988(55)7933